

日本と台湾の大学生の郷土料理に対する意識

西 澤 千恵子

【要 旨】

日本における郷土料理に対する意識を明らかにするために、さらに郷土料理の今後を考えていく上での資料とするために、日本と隣国である台湾の若者の郷土料理に対する意識を調査した。日本の学生（以下、日本と表す）の方が「健康的」と思っていたが、「身近」「作り方」「おいしさ」「印象」「総合して」では有意差が認められなかった。台湾の学生（以下、台湾と表す）の方が食べている頻度や「作りたい」と思っている割合が有意に大きかったが、どちらも約80%が「伝えていくべき」と思っていることが判明した。

【キーワード】日本、台湾、郷土料理、意識

郷土料理とは、その地域特有の産物を使って、独自の調理方法で作られた地域固有の料理である。しかし近年の流通の発達や女性の社会進出、輸入の増加、食の欧米化や簡便化などの社会的変化に伴い、全国的に「食の均一化」が起きている¹⁾⁸⁾。

大分県は山と海があり、そのために食材には大変恵まれ、様々な種類の郷土料理がある。しかし我々が行った大分県における小学生とその保護者を対象とした郷土料理の認知度調査から、市販されていたり学校給食や催し物で作られたりしている料理については知っているが、家庭で作らなければならない料理については知らないという結果が得られている²⁾。郷土料理に対する考えを大学生（85%が食物栄養学を専門に学んでいた）に質問すると、彼らは、郷土料理は健康的でおいしく、印象も総合的に考えてもよいと思いき、1ヶ月に数回食べていると回答した。また郷土料理を作りたいし、伝えていくべきであると考えていた³⁾。

ところで隣国である台湾では、料理は地理や歴史的な関係から中国料理、特に福建料理や広東料理の影響を大きく受け、さらにオランダやスペイン、日本の影響も受けている。中国における「医食同源」の考えを受け継ぎ、滋養食には非常に気を配っている。また台北、高雄、台中という大都市ばかりでなく、西側の台湾海峡に面した地域では郷土料理が発達しており、伝統的な食べ物については外来文化の影響を受けていない⁴⁾といわれている。台湾と日本はともに山も海もあることから食材に恵まれ、さらに米食文化であるという共通点がある。さらに両国ともに近年ファストフードをはじめ様々な食文化が入り込んでいる⁴⁾。

そこで本研究では、地理的に近く、古くから交流も盛んに行われていた台湾と日本を比較することにより日本の現状をより明白に浮かび上がらせ、さらに日本における郷土料理の今後について考えていく上での資料とするために、台湾と日本の20歳前後の大学生の郷土料理に対する意識を調査した。

調 査 方 法

1. 調査方法および調査対象者

台湾台北県新店市にある4年制の大学にいた学生（複数の大学）と大分県別府市にある4年制大学の学生を対象に、台湾に対しては2008年8月に、日本に対しては2009年5月に、アンケート調査を行った。台湾は食物を専門としていない学生で、日本は食物に関係する学部には属している学生54%、他の学部には属している学生45%で、食物に関係する学部には属している学生は、まだ専門的には学んでいない状態であった。同じ内容のものを台湾語と日本語で質問し、無記名の自己記入方式で回答してもらった。なお、回答したものについては本調査以外の目的には使用しないことを明記した。

2. 調査項目

アンケートの内容は郷土料理そのものについて、「健康的であるか」、「身近なものであるか」、「作り方はどうか」、「おいしさはどうか」、「印象はどうか」、「総合してどうか」を、さらに「伝えていきたいか」、「作りたいか」について、評点法で回答してもらった。「どの位の頻度で食べているのか」、「伝えていきたい理由」については、当てはまる箇所に印を付けてもらった。

3. 集計および分析方法

データを集計し、統計ソフトを用いて⁵⁾有意水準5%でマン・ホイットニ検定を行った。

結 果 と 考 察

1. 調査対象者

有効回答数は台湾217、日本214であった。

調査対象者の属性を表-1に示した。性別では台湾では男性が58.1%、日本は24.0%で、家族形態別では台湾では核家族が83.4%、日本では67.8%であった。対象者の年齢の分布を表-2に示した。台湾の平均年齢は22.0歳、日本は19.2歳であった。

表-1 調査対象者 (%)

	台 湾			日 本		
	男性	女性	不明	男性	女性	不明
性 別	58.1	41.9	0.0	24.0	75.2	0.8
家 族 形 態	核家族	拡大家族	不明	核家族	拡大家族	不明
	83.4	14.7	1.8	67.8	28.9	3.3
現在の住居	実家	一人暮らし	寮	その他	不明	
	69.6	13.8	6.9	8.3	1.4	
	77.7	11.6	6.6	4.1	0.0	

2. 意 識

郷土料理についてどう思うかを質問し、回答を図-1にまとめた。「健康的」「身近」「作り方」「おいしさ」「印象」「総合して」のうち、「健康的」の項目のみに、台湾と日本の中で1%の危険率で有意差が認められ、「非常に良い」「良い」の回答が日本で大きかった。「身近」「作り方」「おいしさ」では台湾の方が「良い」と感じている人が多い傾向にあったが、有意差は認められなかった。「印象」と「総合して」は「非常に良い」と「良い」を合計した割合はほぼ同じになり、台湾も日本も約60%であった。

郷土料理をどの位の頻度で食べているかという問いには、台湾と日本の中で1%の危険率で有意差が認められた(図-2)。台湾では「毎日」が20.7%、「1週間に数回」

は33.6%となり、半数以上の人々が1週間に数回以上食べていた。日本では「毎日」が0.9%、「1週間に数回」は9.8%で、両方合わせても約10%で、42.5%が「1ヶ月に数回」と回答した。

「郷土料理は伝えていくべきだと思いますか」の質問には、台湾も日本も同様の傾向を示し、どちらも約80%の人が「非常に思う」「思う」と回答した(図-3)。この理由として、どちらも「食文化を守ることは大切である」「独自の食文化があった方が楽しい」と思っていた(図-4)。なおこの回答は複数回答であり、さらにアンケート調査の有効回答者は台湾217人、日本214人とほぼ同数であったことから、図-4は人数で示した。

次に郷土料理を作ってみたいかと質問したところ、台湾では「非常に思う」が24.3%、「思う」が36.0%であった(図-5)。これに対し日本では「非常に思う」「思う」がそれぞれ9.2%、

表-2 対象者の年齢

	台 湾 (%)	日 本 (%)
18歳	0.0	56.5
19歳	0.0	17.1
20歳	9.2	7.4
21歳	28.1	9.7
22歳	30.4	1.9
23歳	20.3	1.9
23歳以上	12.0	4.6
不明	0.0	0.9
平均(歳)	22.0	19.2

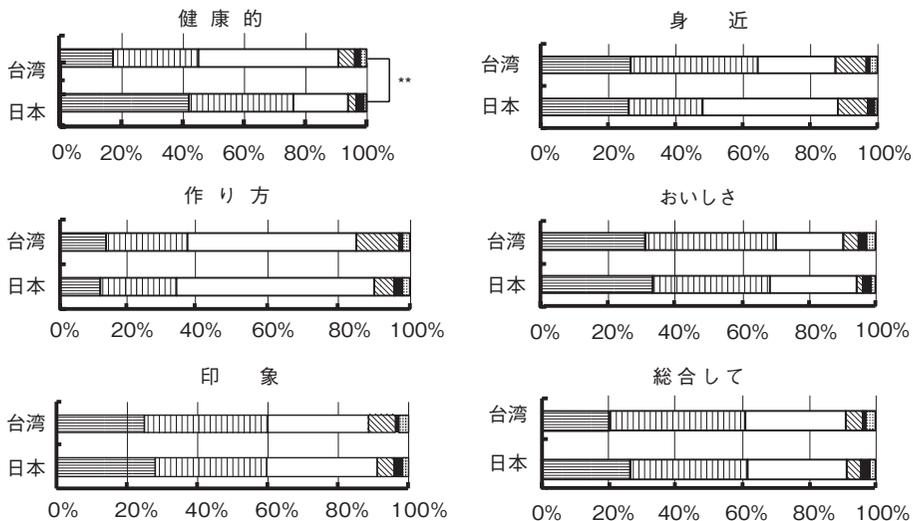


図-1 郷土料理をどう思っているか

非常に良い 良い 普通 悪い 非常に悪い 不明

** : $p < 0.01$

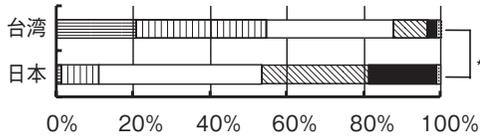


図-2 頻度

■ 毎日 □ 1週間に数回 □ 1ヶ月に数回
 ▨ 1年に数回 ■ ほとんど食べない □ 不明

** : $p < 0.01$

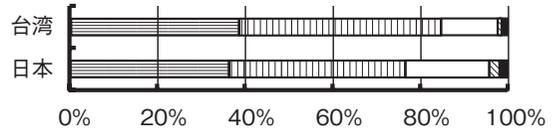


図-3 伝えていくべきか

■ 非常に思う □ 思う □ 普通
 ▨ 思わない ■ 全く思わない □ 不明

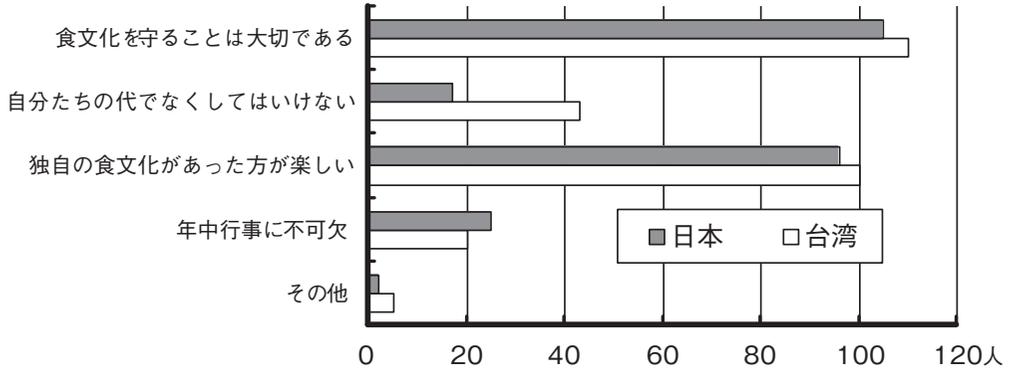


図-4 郷土料理を伝えたい理由 (複数回答)

33.2%、「普通」が45.2%で、1%の危険率で台湾と日本間で有意差が認められた。

食事形態をみると、日本の場合、「外食」をする頻度は拡大家族も核家族も「月に数回」が最も多く59%と54%で、次に多いのは「1年間に数回」で、それぞれ21%、29%であった⁶⁾。一方台湾では、古くから外食が日常的なこととして行われている。現在でも「朝食は外食で」という習慣が一般的であり⁷⁾、ここでの献立は郷土料理が主である⁴⁾。

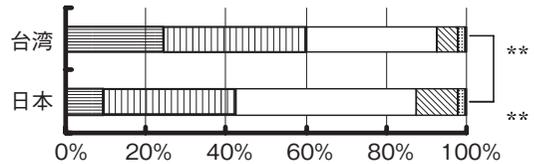


図-5 作りたいか

■ 非常に良い □ 良い □ 普通
 ▨ 悪い ■ 非常に悪い □ 不明

** : $p < 0.01$

調査結果から、台湾の方が郷土料理を食べる頻度は圧倒的に大きかった。この数字だけから判断すると日本の方が「食の均一化」が進んでいることになる。しかし前述したように台湾では朝食は外食が多く、そこで郷土料理が容易に食べられるという事情もこの結果に反映しているのではないと思われるが、本調査では「誰が作っているのか」は質問していないので詳細は不明である。台湾で郷土料理を食べる頻度が大きいことは、「作りたい」と考えている人が多いことと関係があるのかもしれない。また台湾では「医食同源」の考え方がなされ、食に気を配っている。このような考え方が日常化しているために、日本ほどあえて「健康的」とは思っていないということかもしれないし、逆に日本では食べる頻度が台湾より少なく、たまに食べるので「健康的」と理想化する傾向が見られることも考えられる。しかし郷土料理に関して両国ともに「身近で「おいしく」、「印象」も「総合して」も良いが、「作り方」は普通と考えていた。

また両方とも約80%の人が郷土料理は「伝えていくべき」と考えていた。台湾の場合には食べ

ている頻度は大きい。しかし日本では台湾ほど食べていないし、アンケートの余白に「作り方を教えてほしい」旨の記述が多数あった。したがって日本の場合、自ら調理ができない状態で「伝えていきたい」と思っていることになる。

台湾と日本は地理的には隣国であるが、食文化の背景や食材、食事の形態など、様々な点で異なっている。しかし大学生は郷土料理に対して、かなりの部分で共通の考え方をしていることが明らかになった。

今回の調査は台湾と日本の少数の大学の学生間の比較である。したがって国レベルで考えると、この調査が両国の若者のすべてを対象とした調査結果と合致するという保証はないが、両国間の傾向は把握できているものと考えている。

本研究を行うに当たりましてご協力いただきました別府大学文学部の利光正文教授、別府大学短期大学部の立松洋子教授、台湾景文科技大学の先生方に深謝いたします。またアンケートに回答していただきました景文科技大学と別府大学の学生の皆様に感謝致します。

参考文献

- 1) 石川寛子, 江原絢子, 近現代の食文化, アイ・ケイコーポレーション, 2003
- 2) 西澤千恵子, 中村佳織, 高橋里枝, 大分県における郷土料理の認知度 一 家族形態による違い, 別府大学紀要, 49, p157-166, 2008
- 3) 西澤千恵子, 中村佳織, 高橋里枝, 大学生の郷土料理に対する認知度と意識, 平成20年度 日本調理科学会九州支部研究発表要旨集, 12, 2008
- 4) 食材台湾, 柴田書店, 1993
- 5) 4Step エクセル統計, 柳井久江, オーエムエス出版, 2002
- 6) 西澤, 未発表データ
- 7) 福永淑子, 台湾料理一米を中心にして一, 日本調理科学会誌, 21, 119-124, 1988
- 8) 江原絢子, 石川尚子編著, 日本の食文化 その伝承と食の教育, アイ・ケイコーポレーション, 2009